

二〇 名士吟詠（『東郷湖畔めぐり』所収）

千家尊福（宗教家）（八四五）
（九一八）

山陰のいつくはあれと 心さへ

身さへやしなふことやたのしき

鶴の翔にむれゐる鴨の音たてゝ

出湯もよしと人のつけたや

幸田露伴（小説家）（八六七）
（九四七）

あたゝかき人の心のうみよりも

世の春をよふゆもあふれけむ

萩原汎愛（政治家）（八四八）
不詳

いつきても涼しかりけり鶴の翔の

出湯に洗ふ人の心は

三上参次（歴史学者）（八六五）
（九三九）

しつかなるいけの面にかけうつす

養生館のにはのふちなみ

下村海南（政治家）（八七五）
（九五七）

寛もるいでゆのしづく池の面に

落つるをきゝつゆめさめにけり

巖谷小波（童話作家）（八七〇）
（九三三）

長者なら雲買占めよけふの月

（田村）木国（新聞記者）（八八九）
（九六四）

湯あかりて湖の雪見ゆ館かな

ほろ熱き温泉も快し冬木鳴る

青萍 末松謙澄（政治家）（八五五）
（九二〇）

湖心築得一亭成 中引温泉温且清

剩有風光太佳絶 幾人來結鸞鷗盟

日置黙仙（宗教家）（八四七）
（九二〇）

連山涵緑東郷湖 中有温泉風色殊

直好遺功功不朽 養生日月使人娛

渡辺霞亭（小説家）（八六四）
（九二六）

湖心亭静日黄昏 翠色嵐光兩落軒

漁笛度波暮烟白 夕陽照遍鷺田邨

国府屋東（漢字者一八七三）

纖々眉月照清漪 度水繁絃旧竹枝

上綱細鱗鮮上膳 湖廬風味促新詩

東郷湖十勝 東海道人（綿引東海・漢字者一八三七）

藤津桃園

桃花水暖盪輕舟 俯見青螺鏡面浮

絕勝藤津渡頭晚 紅花一簇抱村流

松崎夜雨

烟鬱雨嶂夜光涯 暮色瀟々亦自奇

頓有高人解幽趣 瓜皮一棹到松崎

鷺田落雁

稻香蘆白映秋闌 雨歇江天水有痕

數里黃雲平野暮 幾行霜雁鷺田邨

長江夕照

牧童指處淡烟低 万里長江望欲迷

漁唱声々帆影白 斜陽迤邐斷橋西

橋津帰帆

堤樹帶烟斜照微 掠人唯有水禽飛

春風一脉橋津畔 簫々輕帆載浪歸

羽衣石青嵐

知是天妃騎鶴羣 英雄割據迹方閑

嵐光欲滴羽衣石 爽氣將青雨後山

九品寺晚鐘

二分漁戶一分農 也識湖村生計濃

暮色蒼然人影遠 秋寒九品寺中鐘

湯島寒月

湖心瀲灩月華浮 山色波光碧欲流

浴罷溫泉倚欄処 爽然省却万般愁

大山宿雪

指点淡粧濃沫間 迥從鏡面認孱顏

模柯連岳千秋雪 絕白冲空是大山

龍頭島長橋

忽見長虹架豎樓 龍湯真個是滄州

湖心湧出長生液 不用入山仙訣求

東郷湖十景

山本梅屋（漢學者一八五二—
一九二八）

藤津桃園

園桃花万樹 爛熳醉春風
夕日入林裏 一湖波亦紅

松崎夜雨

煙雨湖山黑 夜深風亦鳴
漁歌聲遠近 篝火滅還明

鷺田落雁

新霜被山野 秋色漸淒清
鳴雁何処宿 蘆間曉唳聲

長江夕照

風歇湖水穩 連山倒影新
漁舟正歸盡 曝網夕陽津

橋津楊帆

海西含夕日 処々水禽鳴
千里明如鏡 波平帆影輕

羽衣石晴嵐

山邑晴余好 嬾然欲媚人
煙嵐映軒窓 十里絕纖塵

九品寺晚鐘

寺門何処是 鐘聲鎖夕陰
殷々遠度水 万景自蕭森

龍湯島長橋

長橋臥波処 未雨是河虹
停杖暫倚檻 吟情自莫窮

湯島寒月

懸樓何足比 設室未為奇
一浴坐蘊月 飄々那処与

大山宿雪

衆嶺皆係子 巍然天外臨
永留千古雪 清白警人心